

# 自分たちの音楽を創り上げる音楽学習の開発 (4)

—音楽科の「協同的創造力」の育成をめざして—

大橋美代子 青原 栄子 桑田 一也 濱本 恵康  
権藤 敦子

## 1. はじめに

平成19年度の教育界も混沌とした社会情勢の中でめまぐるしく変化せざるを得なかった。これは、真に子どもたちのために変えていかなければならないという意味合いと世相に振り回されているのではないかという意味合いも含まれている。中教審での学習指導要領改訂へ向けての動向しかり、OECDの調査結果報告しかりである。しかし私たちは、こういう混沌とした教育界だからこそ、学校教育の中で豊かな情操教育の必要性を感じている。決して音楽教育が担う分野を後退させてはならないという強い意志のもとに日々の授業を真摯に捉え直している。この研究は、私たちのこのような思いから、子どもたち自身が自分たちの感じる音楽を大切に、子どもたち自身の手で豊かな音楽をつくりあげ、成就感、達成感を感じさせることで、感性豊かな子どもたちを育成するための一翼を担うものである。その中でも私たちがこだわってきたことは「自分たちで音楽を創造して表現する」ことで音楽的な力をつけていくことである。そのために着目しているのが「協同的創造力」育成である。これまで、その育成のための題材開発や授業方法の開発を行ってきたが、今回は異校種異学年交流に着目した授業実践を中心にその手だてを記していくものとする。

## 2. 21世紀初頭に必要とされる「協同的創造力」

21世紀初頭を生き抜く子どもたちに必要な力は何であろうか。それは、グローバルな視野に立ち、国の違いを乗り越えたところでのディスカッションや共同作業を進める力と考える。今こそ世界が共に手を結び、グローバルな視野に立って建設的に物事を進めていかなければならない社会的状況であるからだ。この視点から、21世紀を生きる子どもたちに音楽科で育成すべき力は、「自分たちの感じる音楽をイメージ豊かにふくらませながら、協同作業を通して、積極的につくり

出したり表現したりする力」ではないかと導いた。これを音楽科で考える「協同的創造力」であると捉えた。この「協同的創造力」の必要性は次に述べる背景からである。音楽科で考える「協同的創造力」は、「音・音楽」や「言語」を通じてコミュニケーションしながら、自分たちの音楽をともに協同して創造することで、その創造した音楽をもとに感動をともに分かち合えることをねらいとする過程をいう。

アメリカの音楽療法士サイヤー・ガストンは「もし言葉が、人間の心のコミュニケーションをたやすく行うことができるのであれば、音楽というものは存在しなかったであろう」と述べている。これは、人にとって言葉は大事なコミュニケーション手段であるが、音楽には言葉以上のコミュニケーション力があるということを示している。また日野原重明は、音楽とは「言葉で表現できないものを、人の心に伝えるメディアになる。」「音楽とは、テクノロジーと、さらにそのパフォーマンスを通して自分を表現するものである。」<sup>1)</sup>と述べている。共著の湯川れい子は、「音楽にハーモニーをつけるということは、人が出している音を聴くことです。社会的な協調性が生まれる。自ら発するという行動と同時に、他人が発する音を聴くことで、他者の存在を意識し、他者と調和することの大切さを知るようになるし、音楽が社会性を育て、調和の精神を訓練する手段である」<sup>2)</sup>と述べている。

つまり子どもたちが、協同的に音・音楽を通して感動を分かち合うということは、現在の社会情勢からいって非常に有益なことであり、学校教育のなかにおいてなくてはならない時間と言えよう。他者とのつながりが希薄になっている子どもたちではあるが、音・音楽を通して他者のつくり出す音楽への興味・関心を喚起することで意図的なコミュニケーションを生み出し、その行為を通して、共感したり、感情移入したり、分かち合えたりするようにしくんでいきたいのであ

る。そうすることで社会性を育てるとともに音楽的感動を生み出すことで、音楽的感性を研磨していくことをねらいとするのである。音楽的に感動することができれば、協同で音楽をした人との一体感が生まれ、「音楽をやってよかった」という効力感を体感することと思われ、次への活動への意欲とつながり、相乗効果を生み出すと思われるからである。

それでは、音・音楽を通して人とのつながりを深めるために必要となってくることは何であろうか。それは、人のために役立っていると思わせる「自己有用感」を感じさせることであると考え。滝充は「すすんで他者とかわるには、他人との関係で自分が認めてもらってうれしい、自分のしたことが人の役だっという自己有用感が欠かせない。こうした感覚は、さまざまな他者とのかわりを通してしか育たないが、現代の子どもたちには対人体験の積み重ねがあまりにも少ない。」<sup>3)</sup>と述べている。これは、学習内容にかかわってくる事項であるが、授業のなかで活動をする際に、教師が子どもたち自身のイメージや思いを十分に持たせるための支援を行い、それを持ってお互いの思いを葛藤させるように仕組んでいくのである。そうすることで、集団の中での子どもたちの思いが「その考えがいいよ」「その考えとその考えを合わせたらどうかなあ」などと交錯され、自分たちの表現をつくり出していくための土台となっていくものと考え。

私たちはこのような背景から、音楽科における「協同的創造力」の育成の必然性を導き出したのである。

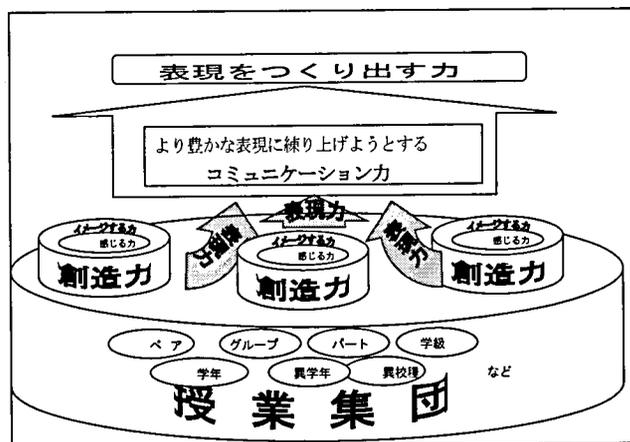
### 3. 研究の仮説

音楽科の考える「協同的創造力」は、それを支える5つの要素、①コミュニケーション力 ②感じる力 ③イメージする力 ④創造力 ⑤表現力を「協同的創造学習」を通して育成し、子どもたちが新たな表現として生みだし発信することで培われるであろう。

### 4. 仮説の説明

#### 「協同的創造力」を支える5つの音楽的な力

本学園の考える音楽科の「協同的創造力」を支える音楽的な要素は、①コミュニケーション力 ②感じる力 ③イメージする力 ④創造力 ⑤表現力の5つで構成されるものとする。子どもたちが、感じる力やイメージする力や創造力を基に、音楽的コミュニケーション力を生かして協同しながらより豊かな自己表現をする過程をイメージ図として記すと次のようになる。



【図-1 音楽科における「協同的創造力」イメージ図】

### 音楽科における協同的創造学習

本学園における「協同的創造学習」の捉えは、「子どもたちが協同しながら、既存の教科学習で学んだ力を土台に、新しい文化を創造・開発していくような力を育てる学習」である。それを受けて音楽科では、「集団で表現をつくり出す」過程をいい、個々が抱えている既存の音楽的価値観を集団の中で練り上げ、新たな音楽（文化）をつくり出す過程をいう。

その過程のなかで特に配慮する点は、子どもたちが各々で感じる多様な音楽的価値観を、コミュニケーション活動を通してすり合わせていく際、自分の思いや表現を人に押し付けるのではなく、お互いにもっている「よさ」を共有し合い、それをともに表現することに意義があると考えさせることである。「こんな感じ方もあるんだね」「こう表現すれば音楽がもっと豊かになるんだね」とお互いに認め合い、表現を広げていこうとする姿を目指している。言い換えれば、協同作業を通して子どもたちに培われる他者を意識する思いを土台に、子どもたちの感性および表現力を高めていくことである。子どもたちは、音楽の授業などを通じて協同的に表現するなかで、お互いの思いや表現の特長に気づき、それを学び合うことで共に高まり合う。その結果、子どもたちの個としての音楽的能力も伸張されるという相乗効果をねらっているのである。

### 5. 「協同的創造力」の評価について

本学園音楽科が考える「協同的創造力」は、「自分たちの感じる音楽をイメージ豊かにふくらませながら、協同作業を通して、積極的につくり出したり表現したりする力」であると説いた。この力を評価するための方法を次のように実践している。

- ①学習のねらいと評価の規準を明らかにする。
- ②自己評価できやすいような規準を設けるようにする。

③実際にやっている過程やその様子を評価したり、それをフィードバックして改善したりする様子を評価する。

④子どもたちが練り上げてつくり出した発表を大事にする。

①②については、次のような評価表をつくって子どもたちが自己評価できるような仕組みにし、本時の授業について真摯にふり返ることができるようにしている。

### 【評価表の例】

7年生 音楽科 授業評価表 11月22日(金)			
組 番 前( )			
1. 学習課題			
7年生が協力して「つくろう！オリジナル『さくらさくら』」のアイデアや意見を出し合おう！			
2. 本時の評価(3段階で自己評価をしよう！あてはまるものに○をつけよう！)			
	A	B	C
7年生が協力して「つくろう！オリジナル『さくらさくら』」のアイデアや意見を出し合おう！	7年生が協力して「つくろう！オリジナル『さくらさくら』」のアイデアを出して演奏することができた。	7年生が協力して「つくろう！オリジナル『さくらさくら』」のアイデアを出すことはできた。	7年生が協力して「つくろう！オリジナル『さくらさくら』」のアイデアを出すことも演奏もできなかった。

③については、「練り合いの場面」を協同的な場面と位置づけて観察法(それがTTであればさらに効果的と思われる)や各時間のワークシートのふり返りから見取ることができるようにする。観察法においては、表現が高まるための意見をより多く出そうとしている姿や協同して話し合いを進めている場面を指導者によりチェックできるようにしている。

④については、ワークシートによる自己評価や他者評価、また指導者によるアドバイスや客観的評価ができるようにする。ワークシートには、練り上げるときの様子とともに本時の演奏について子ども自身の思いを率直に書かせるように促す。また、中間発表など他者に演奏をきかせることで、客観的な意見やアドバイスを取り入れることで協同的に高まる場を設けることも必要とする。さらには、教師による支援や演奏をビデオに撮ってそれを客観的に視聴することでグループのねらいに合った表現に迫れているかをふり返させたり、異学年・異校種の子どもたちにきかせることで違った視点からの意見をきくことでふり返させたりする場面を設けるようにする。

このようにして協同的な学びの場面に焦点を当てて「協同的創造力」をはかる手だてを施すわけであるが、「最終的には協同して子どもたちがどのように変容していくのか」を全題材通して見取る必要があると思わ

れるし、そのための記録を残すことができるようにする手だてを考える必要がある。

## 6. 授業の実際

### ○小中合同授業の実践

—4年生と7年生の実践を通して—

(1) 題材 「さくら さくら」のアレンジに挑戦！  
つくろう！私たちの合同アンサンブル

(2) 題材設定の理由  
(4年生)

本題材は、日本古来から歌い続けられている「さくらさくら」の曲を味わい、自分なりに合う音を見つけ、アレンジしたり、試したりしながらオリジナルの曲に仕上げる学習である。歌詞や情景からイメージを膨らませ、楽曲に合う音を吟味しながら付け足していく。更に、7年生と4年生の合同グループを意図的に設定することで、お互いの思いや感じ方を伝え合いながら、自分たちなりの「さくらさくら」を表現する力をつけさせる。そして、合同アンサンブルを通して、日本の旋律やふしまわし、和楽器である箏の音色の美しさなどを感じ取らせ、同時に自分たちの音楽をつくり出す「よさ」を体感させていく。

(7年生)

本題材は、箏演奏のための基礎的な奏法を身につけ、和楽器の音色に親しむとともに既習のアルトリコーダーと合わせたり、4年生と合同授業を行うことで表現の工夫を加えたり、高学年としてリーダー性を発揮したりしながら表現豊かにアンサンブルをつくり上げることができるようになることをねらいとする題材である。箏がアンサンブルの中に入ることで、自然と日本的な響きを醸し出すことができるし、和楽器を演奏することでより日本音楽に出会い、その感性を高めることができる。教材は、「さくらさくら」を用いる。この曲は、日本古謡としてなじみがあるため、箏に初めて挑戦する生徒たちにとってなじみの音を頼りに演奏することができたり、比較的音順次進行するため演奏しやすかったりという長所がある。また、情景描写を想起しやすいというメリットがあり、そこからイメージをふくらませることでより豊かな音楽づくりへと発展させやすいと考えられる。また、合同授業を取り入れることで、4年生の価値観と7年生の価値観をすりあわせ、他者を理解するというコミュニケーション能力やお互いの考えや技能を磨き合い、より高い価値を獲得したり、一人ひとりの思考や表現を深めたりすることが有効である題材である。その過程を経て、アンサンブルで自分たちの音楽をつくり出す「よさ」を発揮できるように活動させることを

試みる。

### (3) 題材の目標 (4・7年生 共通部分)

○4年生と7年生がお互いに自分たちの思いを伝え合いながら、オリジナルの「さくらさくら」をつくり出すことができるようにする。

(4) 合同授業の中で「協同的創造力」をどう育むか  
「自分たちの表現をつくり出そうとする力」を支える5つの要素を本題材の中でどのように育てていくことができるか、をそれぞれの要素について述べていく。

#### 1) コミュニケーション力

とかくかかわりが異校種・異学年ということになると普通の授業とは違う独特の緊張感がみなぎってくる。低学年の子どもは、高学年の子どもとかかわることで自分たちが持っている知識や経験とは高次元次元で課題について解いてくれることへのあこがれの念が期待できる。また、高学年の子どもは、低学年の子どもとかかわることで、これまで学習していることであっても忘却していることを再度思い起こさせてくれたり、凝り固まっている既成の概念を切り崩して斬新な思いを呼び起こさせてくれたりということも期待できる。そして、お互いの表現を交錯させるなかで前出した「自己有用感」を感じさせることで、お互いのよさを認め合いコミュニケーション力を高めることができると考える。

#### 2) 感じる力

本題材は、日本古謡「さくらさくら」の旋律を用いることで「日本的な旋律」を子どもの感性にアピールすることが容易であり、「さくらさくら」を箏やリコーダー、打楽器で演奏するとともに、「日本的な音って？」と日本人ならではの心の機微へと発展させることも可能であると考えられる。

#### 3) イメージする力

日本の四季のなかでもさくらが咲く春の情景を子どもなりにイメージを広げ、それを「さくらさくら」の旋律とともに演奏し、さらにはその旋律を引き立てるためにはどのような手段をとればより個性的で子どもたちのイメージする音楽になるのかを考えさせることは意義深いと考える。どちらかと言えば西洋的音楽の環境にどっぷりと浸っている現代の子どもたちが「さくらさくら」の旋律をもとにどのような情景をどのような楽器を使い、どのような演奏をしたいと考えるのか興味深い。

#### 4) 創造力

子どもたちがイメージを広げることで、さらなる工夫をめざすことで育成していく「創造力」は、①「さくらさくら」を演奏するための楽器や音の選択と②ど

のようなアレンジで演奏すればよいか、という点で培いたいと考えた。①では、箏、リコーダー、声、生活の中での音などをどのように組み合わせればよいか？ということを考えさせ、②ではそれをどのような構成で演奏することで効果的なのか、ということを考える。その構成力が問われるわけだが、「さくらさくら」の演奏に入る前の前奏部分に個性をもたせるという取り組みも同時に考えさせたい。

#### 5) 表現力

「豊かな自己表現」が求められる「表現力」は、合同授業とは別の各学年で奏法の基礎基本などを定着させてから合わせることで効果的であると考えられる。例えば、箏の奏法やリコーダーの奏法が身に付いていない状態で合同の演奏したところで子どもたちの表現を追究することにはならないからである。そして、合同で演奏する際には、お互いの音をよくきき合うなかで、合図の出し方ひとつをとっても高学年のリーダー性が問われるわけでどのような音楽をつくりあげたいのか？というゴールのイメージを持たせてともに作り上げていく楽しさや喜びを感じさせながら表現に結びつけていきたい。

#### (5) 協同的創造力の評価【表1参照】

#### (6) 指導の実際

##### 1) 4年生の実際

〔第1次 情景を思い浮かべ、楽曲の感じをつかもう〕

「さくらさくら」は4月の上旬に出会った曲である。そのため、桜のイメージを膨らませながら歌う活動は行っていた。本次では、写真などを使い、より詳しく楽曲についてほりさげていき、曲想の感じや他の曲と比べて何がどのように違うかなどを話し合っていた。子どもの感想では「ゆっくり歌われている」「大きな桜の木が思い浮かぶ」「ちょっと暗いかんじがする」などが出てきた。

〔第2次 楽曲の感じに合った歌い方や演奏の仕方を工夫しよう〕

前時のイメージをもとに、それに合う歌い方や演奏の仕方を工夫していった。歌では、「たっぷり歌う」「息をつなげて歌う」など意見が出て、ゆったり歌う工夫が見られた。リコーダーには、初挑戦だったが、低い音を出すのに苦労していた。日々の練習を積み重ねる必要があると感じた子どもが多かった。学習形態を個から小グループへと変えていき、出にくい音や曲に合う演奏の仕方するためのアドバイスをグループ内でお互いに言い合った。「低い音はゆっくり吹くほうが出やすいよ」「速いよ」などいい演奏にするため、高めあう姿が見られた。しかし、個々の技能には差があり、かなりの練習を重ねる必要がある子どももい

【表-1 協同的創造力評価表】

評価の対象	具体的評価規準	AとBの判断基準	評価資料
コミュニケーション力	・お互いの思いや意見を尊重しながら受け止めようとしている。	B：相手の意見や表現を受け止めている。 A：相手の意見や表現を尊重しながら肯定的に受け止めている。	行動観察 ふり返りプリント
	・個々で膨らませたイメージを共有するためにコミュニケーションしようとしている。	B：個々のイメージを出し合っている。 A：個々で持っているイメージを発話や音を通して表現することでイメージを共有しようとしている。	行動観察
感じる力	・音素材のイメージをグループで共有し、その表現に合う雰囲気や音楽の構成要素（リズム、旋律、音色、音の重なり、強弱）などを感じ取っている。	B：表現に合う雰囲気や音楽の構成要素などを 感じ取っている。 A：音素材のイメージをグループで共有し、その表現に合う雰囲気や音楽の構成要素などを曲に照らし合わせて感じ取ろうとしている。	行動観察 話し合いの様子 音選びの様子
イメージする力	・グループでさくらが咲く春の情景を想像し、旋律を引き立たせるための音・楽器や演奏形態を考えようとしている。	B：旋律を演奏するための音・楽器を決めようとしている。 A：グループでさくらが咲く春の情景を想像し、旋律を引き立たせるための楽器や演奏形態を考えようとしている。	行動観察 表現活動 ワークシート
創造力	・グループで演奏するための音や楽器の組み合わせなどの曲の構成を考え、よりよい表現を試行錯誤しながらつくり出そうとしている。	B：演奏するための音や楽器について考え、つくり出そうとしている。 A：グループで演奏するための音や楽器の組み合わせなどの曲の構成を考え、よりよい表現を試行錯誤しながらつくり出そうとしている。	行動観察 表現活動 イメージマップ
表現力	・グループで共有したイメージをもとに、みんなでつくり出した音や楽器を使って豊かに表現している。	B：音色や楽器を使って表現している。 A：グループで共有したイメージをもとに、みんなでつくり出した音色や楽器を使って豊かに表現している。	行動観察 表現活動

た。  
〔第3次 楽曲の感じに合った音を探し、演奏に生かそう〕

この時間の始めに、「4. 7年合同アンサンブル」について子どもたちに投げかけ、4年生として何ができるかを話し合った。4年生は今まで練習してきたソプラノリコーダーとそれに合う音を探そうということに決定した。そこで、リコーダー奏の練習と同時に、曲にあった音を探していった。「さくらさくら」のイメージをふくらませながら、どんな音が合うのか音探しを行った。子どもたちは「日本の歌」というイメージが強く、和太鼓などの楽器の音色を試していた。しかし、時間と共に「これも意外と合うよ」「これは



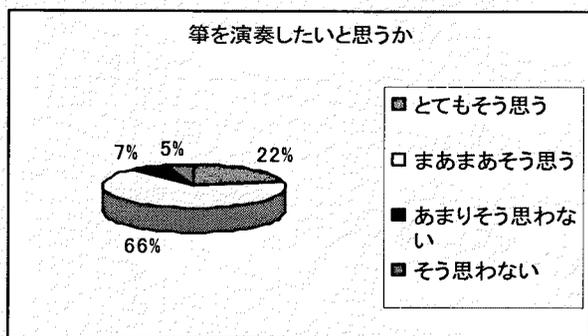
どう？」など音楽室にある様々な楽器の音色を試すようになった。グロッケンや鉄琴、オルフ楽器、すず、ウィンドチャイムなどの音色を選んでいった。音が決まったグループから演奏の練習に入り、7年生との合同アンサンブルでは、ぜひ4年生の演奏を聴いてもらおうということになった。ピアノで伴奏を入れたり、リコーダーで追いかけこのようにずらしながら演奏したりするなど工夫しながら演奏をしていた。音楽の授業だけでは時間が足りなかったため、放課後なども使い、グループでの音あわせを行っていった。

## 2) 7年生の実際

〔第1次 箏に挑戦しよう〕

7年生は、まず箏演奏のための基礎的な奏法を身につける学習を行った。7年1組の中で「箏を演奏したことがある生徒」は11名、「演奏したことがない生徒」は30名である（事前調査 平成19年11月1日、41名）。「箏を演奏したことがある生徒」は、「7年選択Aで」8名、「小学校の授業で」2名、「祖母の家で」2名と

学校外でふれ合う機会は極めてまれであることがわかる。また箏の演奏に対する生徒の思いをグラフによって示すと次の通りであった。



このグラフからもわかるように、学習前にとったアンケートでは、箏の演奏に対する思いは高いことがわかった。よって箏をアンサンブルの中に入ること、音楽的な高まりを期待できることと、箏の音色が自然と日本的な響きを醸し出すことができ、日本の音楽に出会い、その感性を高めることができると考えた。教材は、「さくらさくら」二重奏を用いた。この曲は、日本古謡としてなじみがあるため、箏に初めて挑戦する生徒たちにとって音を頼りに演奏することができたり、比較的音が順次進行するため演奏しやすかったりという長所がある。また、情景描写を想起しやすいというメリットがあり、そこからイメージをふくらませることでより豊かな音楽づくりへと発展させやすいと考えられる。

指導にあたっては、まず全員を箏の演奏に挑戦できるようにした。箏の数に合わせて10のグループをつくり、練習時はローテーションを組み、演奏者とともにそれをきいたりみたりしている者も、ともに学べるように声をかけるようにした。

学習の様子としては、箏の数に限りがあるのでローテーションの順番が回ってくるまでの時間的なロス可否めないものの、ともに演奏技術を高めていこうとする集団的向上志向は感じることができたし、箏に対する基礎基本詳細まで

しっかりと定着させるまでには至らなかったかもしれないが、ほとんど生徒が箏の演奏技術向上のために努力を惜しなかった。



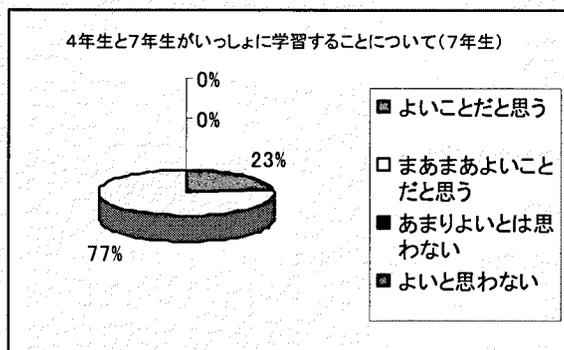
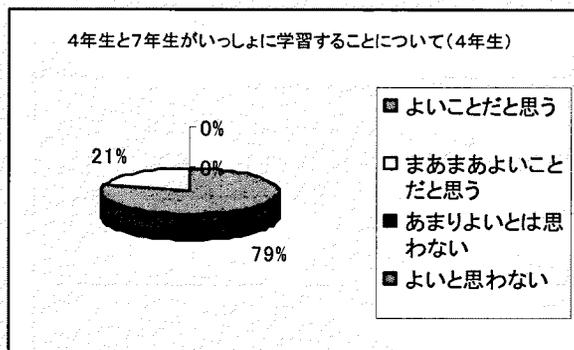
〔第2次 工夫できるように合わせてみよう〕

4年生との合同授業でより豊かに演奏できるように、アルトリコーダーでも「さくらさくら」が演奏で

きるようにした。サミングの多用など難しさを感じる箇所はあるものの、耳慣れた旋律なので果敢に挑戦する姿をみることができた。そして「さくらさくら」の主旋律に副旋律をつけて二重奏ができるようにも試みた。副旋律は例を示すとともに、自分たちでも簡単な副旋律をつけることができるように促した。この学習は、ゆとりをもった指導ができず、自分たちでつくって二重奏を試みるというところまでにはなかなか到達することができない生徒がほとんどであったが、中には「オスティナートの」「三度の音程で」など工夫する生徒もみられた。最後には、箏とアルトリコーダーのアンサンブルをグループやクラスで演奏し4年生との合同授業に備えた。

### 3) 合同授業での実際

合同授業に向けてその期待度についてアンケート調査を行った。結果は次の通りである。



4年生は、「よいことだと思う…79%」と圧倒的に合同授業についての期待度が高い。その理由としては、「仲が深まると思うから」をあげているものが多かった。それに比べて7年生は、「よいことだと思う…23%」と少し期待度は低いものの、まあまあよいことだと思うと合わせれば100%の生徒がよいことだと思っている。その理由として、「他学年と交流することで仲が深まると思う」と4年生と同じように心情面を一番に挙げている生徒が多かった。

また、「いっしょに学習することでどのようなことが学べると思うか?」という問いについては、次のよ

うにあげている。

#### 【4年生】

- ・合わせようとする気持ちを学ぶ。
- ・音楽が好きになれたり、仲良くなれたりする。
- ・いろいろな楽器がひけるようになる。
- ・きれいなハーモニーがつかれる。
- ・箏とリコーダーでやるときれいになる。
- ・いろんな楽器を使ってもっといい「さくらさくら」になると思う。

#### 【7年生】

- ・相手の音をききながら音を合わせること。
- ・ソプラノリコーダーの音色とアルトリコーダーの音色と箏の音色を比べられる。
- ・協力する力、みんなで合わす力
- ・交流することのよさが実感できる。
- ・他学年の気持ちや表現力
- ・箏とリコーダーの重なりをきく。
- ・ソプラノリコーダーとアルトリコーダーと箏が合っ  
てきれいな音がでると思う。
- ・4年生さんにとっては、箏がどのようなものなの  
か知ってもらえるし、7年生にとっては、ソプラ  
ノで合わせるのは初めてなので、いい勉強になる  
と思う。
- ・きくことから鑑賞力がつく。人前で演奏するとい  
う普段しないことができる。

この問いに対しては、心情面だけではなく音楽の構成要素に気づいて記述していることが特長としてあげられる。4年生にもこのような児童がいるが、7年生はこれまでの経験から音楽的構成要素についてあげている回答が多く、これまで別々に行ってきた表現の基礎基本を定着させると共に、協力して合同で音楽を演奏することで素敵な音楽を表現できるのではないかと期待感を持っていることが伺える。

#### 《第1回合同授業》

4年生は、ソプラノリコーダーで「さくらさくら」の主律を演奏することとその旋律に合わせて打楽器やキーボード等の楽器が補助する形態で演奏をまとめた。7年生は、箏で「さくらさくら」の2重奏ができることと「さくらさくら」の主旋律をアルトリコーダーで演奏することができるようになる状況で合同授業を迎えた。4年生と7年生は、各



グループに分かれたり、全体で演奏したりすることでこれまでの学習を披露し合った。その場では、お互いの演奏に対する成果をたたえたり、7年生は4年生の楽器の組み合わせについてアドバイスしたりする様子うかがえた。

続いてモデル演奏をきかせたり、例示を模造紙で示したりすることでこれからの活動の見通しを持たせるようにした。そして、各グループでどのような「さくらさくら」を演奏したいか、イメージをふくらませるためにその情景を文章で表すことと使用する楽器や声、生活の中で使えるものを書き出し、「どの楽器がどの情景を演奏するのか」を模造紙にイメージマップ的に書き出させるようにした。

#### イメージマップの例

桜山で桜が満開に咲き、風が吹いて桜が散っていく風景

- ・桜が散る様子→「鈴」
- ・春らしさ →「箏の副旋律」
- ・風 →「ソプラノリコーダーでメロディーライン」
- ・風 →「アルトリコーダーでメロディーライン」

《合同授業を行った後の「ふり返り」から》

#### 【4年生】

- ・箏がひびいていてきれいでした。7年生と4年生で良い「さくらさくら」ができそうです。
- ・7年生さんはことがひけてすごいなあと思いました。イメージマップもだいたいできてみんなに負けないいいものをつくりたいです。
- ・えんそうもうまくいって良かったです。合わせる  
ことができてアドバイスももらって、生かせる  
いいなと思いました。

#### 【7年生】

- ・今日はいろいろと考えることができました。ソプラノリコーダーの音色が懐かしかったです。
- ・もう少しリコーダーの音を強くしたらいいという意見をいいました。
- ・僕は、「清水寺に舞うが桜」というところが気に入っています。

#### 《第4回合同授業》

前回の合同授業の課題をそれぞれの学年で再度、確認したり練習したりしながら4回目をむかえた。4年生は分担された役割の楽器を練習し、7年生は全体的

な曲の構成をイメージしながら練習を行った。授業の始めに各グループで、自分たちの工夫点を出し合い、確認し合った。



「桜の花びらが散るようにゆっくりめに演奏します。」「いろいろな楽器を使うことで曲のイメージを膨らませます。」など他のグループの工夫点にも気づけた。そこで、その工夫点を意識しながらグループ練習にうつった。リコーダーや箏、打楽器の演奏も少しずつ合っていった。また、6年生への発表に向け、相手を意識した立ち位置や視線なども工夫できていたグループもあった。

〈合同授業を行った後の「ふり返り」から〉

【4年生】

- ・研究会だったのできちょうしたけど、協力しながらできたし、イメージマップのような感じに近づけたから良かったです。
- ・前よりも花びらが追いかけてこすところや、花びらが散るところがすごくきれいになってよかったです。
- ・今日はねらいの「4年生と7年生で協力する」という所がよくできました。私は箏をするんだけど、7年生さんに「もっとゆっくりしようや。」と言われてアドバイスを生かしてもっとがんばりたいです。

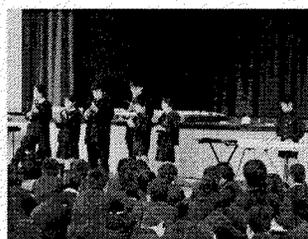
【7年生】

- ・隊形について打ち合わせ不足だったから、次から気をつけたいです。
- ・だいぶんまとまってきて、あとは一人ひとりのミスをなくすと、他の人の音をきくってところをがんばりたいです。
- ・今日はたくさん練習をしました。私のグループは「ずらして演奏する」のでそこがとても難しかったので、次は完璧にできるようにがんばりたいです。
- ・みんなで合わせる事ができるようになったので、次は速さを中心的に細かいところを直していきたい。楽器同士の音をひきたてるようにしたいです。

《第6回合同授業（発表会）》

今までの練習の成果を出し切り、来年箏に出会う予定の6年生に対して発表会を行った。

6年生も、間近で箏の演奏を見たり聴いたりするのは初めてだったため、真剣に聴いてくれた。4、7年生は、自分たちのグループの工夫点を発表したあと演奏に入った。自分たちの表現方法と異なる演奏のため、真剣に聴くことができていた。



〈発表会後のふりかえりから〉

【4年生】

- ・7年生といっしょに授業をして「さくらさくら」を演奏することをがんばって、発表会で良い演奏ができてよかったです。
- ・いろいろな工夫の仕方を加えてよい音になってよかったです。
- ・7年生との合同授業で、和楽器にも慣れたのでよかったです。また今度もやりたいなと思うほど、アンサンブルが楽しかったです。
- ・はじめは話を通じるかどうか不安だったけど、4年生が提案したことにとどうすればよいか考えてくれたので良かったです。協力し合いながらできたので今度もやりたいです。
- ・6年生さんにも聴いてもらえてうれしかったです。

【7年生】

- ・7年生が4年生をカバーすることによって、とてもきれいな「さくらさくら」が演奏できて、よかったです。それぞれの雰囲気を取り入れることができました。
- ・演奏がとてもよかったですし、合同授業はとても楽しかった。自分たちが考えつかなかったことも、4年生が考えついて本当にびっくりだった。また一緒にやりたいです。
- ・はじめて4年生さんと交流をして、息を合わせる事の大切さを知ることができたので良かったと思います。
- ・4年生と仲良くなれた。楽しかった。4年生と交流したおかげでいろいろと学べた。もう一度同じ人とペアを組んでやってみたい。
- ・今まで何時間か交流してきて、最初は練習が進まなかったり、ばらばらだったりしたけど、だんだん団結してきて、発表の時には、みんなで楽しく

できたのでよかったです。

- ・初めは、4年生と7年生が全く違う楽器で、テンポが違って苦労したけど、最後はミスもあったけど、しっかり演奏できたのはよかった。
- ・最初はあるまじやる気がなくて練習が進まなかったけど、2回目、3回目でみんなが意見を言い合うようになり、工夫することができるようになったので、本番はとても良い演奏ができたと思います。
- ・それぞれの学年の良いところを引き出すことができたと思います。お互いに良い勉強になれたので、よかったと思います。

#### 4) 実践をふりかえって

##### ①小学生の立場から

- ・4年生は主に、ソプラノリコーダーの演奏と、曲に合う音を探し提案していった。音探しではなぜその音が合うと思うか自分たちでまとめ7年生に提案したが、叩き方や演奏の仕方が徹底していなかった。基礎基本は単学年で押さえておかなければならなかった。
- ・4年生だけでは感じることのできないアンサンブルの楽しさを味わったり、音が重なる美しさを感じさせたりすることができた。7年生に自分たちの学習の成果を提案したり、アドバイスを受けてたり、話し合ったり、共通のイメージを膨らませたりしながら演奏する活動は、ともに高めあう協同的な学びになった。しかし、音を合わせることで一生懸命になり、音に深みや質の高まりが感じられなかったグループもあった。4・7年生で合同アンサンブルをする効果や意義をもっと意識させる必要があった。
- ・合同授業終了後、95%の子どもが、「いっしょに学習することは良いことだ」と肯定的な評価をした。日ごろ、同じ学園内で生活してはいるが、顔を合わせて話す機会は少なかった。今回の活動では、お互いの思いを交流したり、より良いものをつくらうと試行錯誤したりする姿が見られ、子どもたちの表情は達成感に溢れていた。

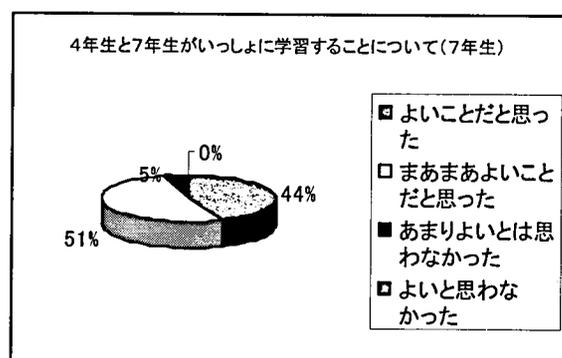
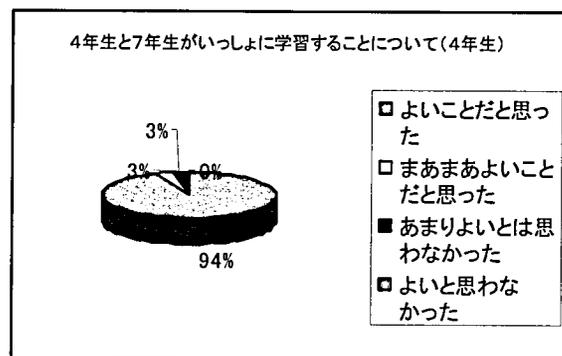
##### ②中学生の立場から

- ・箏の演奏には積極的に取り組む姿が見られた。初めて取り組む生徒が多かったわりには、積極的に取り組めた理由としては、箏の音色が生徒の箏線に触れたことと、思ったより抵抗なく副旋律まで演奏できたことに満足しているからだと思われる。しかし、楽器の奏法に関しての技能を高めることもより演奏を高めるための一翼を担うと思われるので、そのための指導法については教師自身の研鑽が必要だと思わ

れる。

- ・箏の演奏に時間がかかったため、アルトリコーダーでの演奏に今一步時間をとることができず、生徒にアルトリコーダー独特の深みのある音色で演奏させきれいな実態があった。また、教師のほうがか張り過ぎたり、指導が徹底しなかったりしたため、アルトリコーダーで副旋律をつけるなどの多少高次の演奏提案が中途半端なかたちに終わったように思われる。
- ・中学生は、4年生と言えども自我が高まっている小学生をリードしながらアンサンブルをまとめていくことに四苦八苦している様子も伺えた。これは、中学生自身がイメージから発展させて「どのような音楽を創造していきたいのか」という思いを持たせきれいなかったように思われる。4年生を交えたときに、教師は、自分たちのめざす音楽が提案できるまでに思いを高めていくための手だてを具体的に講じる必要性を感じた。

## 7. 研究の考察



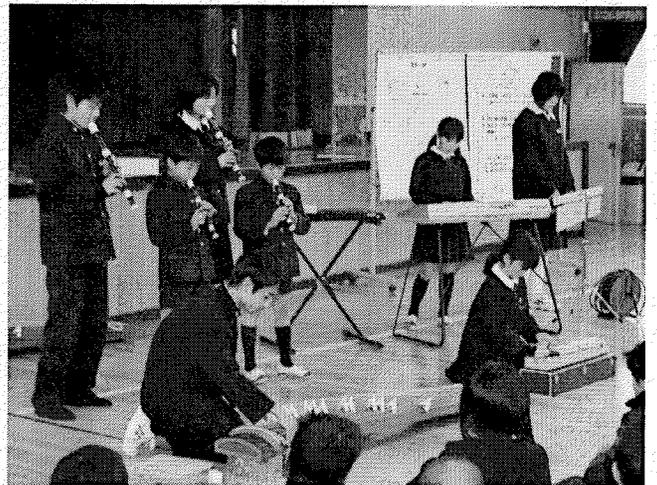
まず、実践を終えての事後アンケート着目したい。「4年生と7年生がいっしょに学習することについて」の「よいことだと思った」のパーセンテージが4年生は79%が94%に、7年生は23%が44%に数値が上がっている。これは子どもたちが、学習前と比べて学習後は思ったより合同授業に意義を見出し達成感があったことを示している。それは、子どもたちのふり返り

からも察することができる。学習前には漠然としていた思いが、学習後にはより具体を帯びてきている。4年生は、ふり返りのなかで「7年生がいろいろわかっているいろいろなことを教えてもらった」「アルトリコーダーや箏の音を感じながら違う学年と授業ができたからよかった」等と答え、7年生は、「音の重なり方や音色同士の重なりを考えながら演奏することが学べた」「7年生では出てこないアイデアも出てくるので、いろいろな合わせ方を学ぶことができた」「イメージするときの創造力がついた」等、各々の合同授業に対する効果についての意見が具体化されてきている。さらには「よいことだ」と思っている子どもほど、「お互いが深くかわり合い交流ができ学ぶべき点が多かった」という結果が出ている。つまり、自分たちの表現の最終的な表出場で満足感や達成感を得ることとともに、学習過程で「自分たちがお互いにコミュニケーションを通して交流し、アンサンブルを創り上げることに寄与できたか」ということに起因していると言える。そのための手段として本研究では、

- ア 自己、または他者とともに感じること
- イ 自己、または他者とともに感じたことをイメージ豊かにふくらませること
- ウ 音を通してイメージしたことをアンサンブルという形で創造すること

を学習過程の中で仕組んでいったことは有効であったことが検証できたと見えよう。楽器演奏の技能面においては課題が残るという反省はあるものの、箏を実際に演奏することで音に対する感じ方が子どもたちにこれまでよりも広がりを持てたこと、(これは、4年生単独では感じるできないところを7年生がともに演奏するという形で直接体験に近い形で実現できたことがメリットである。)「さくらさくら」という楽曲が情景描写をイメージしやすかったということ、4年生が学習している題材と7年生が学習している題材をタイミングよく合同授業として成立させることで双方のメリットを活かして音楽を創造することができたこと、等が子どもたちの達成感につながっていると思われる。つまり、音楽科が考えている協同的創造力を

支える5つの要素「コミュニケーション力」「感じる力」「イメージする力」「創造力」「表現力」を学習過程の要所で育てていくことでそれらが相まって子どもたちが力を発揮することができたのではなかろうか。また授業の形式も、「単独で」「合同で」というタイミングを図りながら互いが醸成するときを見計らって合わせることで協同的創造力育成のためには効果的であることが確認できた。ただ、異学年で合同授業をするということは、子どもの人数が多くなかなか気配りができないというデメリットがあることが最大の難関点であろう。その課題を克服するためには、「何をどのように協同させることで力をつけるのか」ということを教師相互でしっかりと確認の上で行わなければならないということを再認識する機会を得たと言えよう。これらの成果と課題をもとに、さらなる合同授業の題材開発に挑戦してみる機会を得たいと思える実践ができたと思っている。



#### 引用(参考)文献

- 1) 日野原重明・湯川れい子共著 『音楽力』 海竜社、2004年 p. 100
- 2) 日野原重明・湯川れい子共著 『音楽力』 海竜社、2004年 p. 125
- 3) 滝 充著 「教育を考える」 中国新聞2007. 8. 16 (木)